

うっかりする墓がいい

牧師 山本 護

「石に腰を、墓であったか(山頭火)」。遊行僧の姿で各地を漂泊し、喜捨乞食(こつじき)の日々に数多の自由律俳句を記した種田山頭火(1882~1940)。よっこらしよ、草に埋もれた路傍の石に腰おろすと何やら文字(もんじ)が、うひゃあ墓ではないか、という滑稽な哀句。よく知られた「うしろすがたのしぐれていくか」にしても、「分け入つても分け入つても青い山」でも、山頭火の句は柔らかく物悲しい。あれこれ考えずとも、その光景、その心象、その境涯、その悲しみやおかしみなどが、ぽっかり浮かびあがります。

これから計画する八ヶ岳伝道所の教会墓も、小さな墓石一つにして、ともすれば腰かけられてしまうようなものもいい。自分の遺骨がそこに納められると想像し、誰かがうっかり腰をおろしてくれたらおもしろい。山頭火だって死者に対して「御無礼申し訳ない」というより、尻下の石に生の句読点を感じて、慰められる思いだったでしょうから。



伝道所の作庭は無計画で夏季に草刈りするくらいですが、梅雨のとある日、十字架の周囲がどことなく墓所に見えました。このあたりに、うっかり腰かけてしまうような墓石を置けたらいいのだからなあ。死者と生者が共に礼拝する感じにならないでしょうか。

「主は、モーセをベト・ペオルの近くのモアブの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれも彼が葬られた場所を知らない(申命記 34:6)」。尾根や谷筋にはいにしえからの道があり、旅人がひと休みする時、そうとは知らずにモーセの墓石に腰かけている。そんなことを思い描くと、郷愁めいたものを感じて胸がしくりとなります。

モーセは神の仲保者にして傑出した民の指導者。しかし、それを為さしめたのは主なる神なので、顕彰碑のような墓はふさわしくありません。伝道所が構想する墓も、神に従う者たちらしいものにしたい。すなわち、旅人がうっかり「石に腰を、墓であったか」となるような、慎ましく、長閑で、自然に溶け込んだものでしょうか。Ω